

辻井 喬

短篇集

過ぎてゆく光景





過ぎてゆく光景

辻井 喬

文藝春秋

短篇集 過ぎてゆく光景

一九九六年一月二十五日 第一刷
一九九六年三月五日 第三刷

定価はカヴァーに表示してあります

著 者 辻 井 喬

発行者 湯 川 豊

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―三三

印刷 大日本印刷
製本 中島製本

©Takashi Tsuji 1996 Printed in Japan
ISBN 4-16-316040-X

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

目次

森のざわめき

5

夕紅葉

61

幻の虎

117

漁火

189

あとかき

260

短篇集

過ぎてゆく光景

装丁 中島かほる

写真 石川賢治

森のざわめき

ようやく眠りかけると、どこからともなく怪し気なものが現れて南を悩ませた。それは意思や感情を持つている生物ではなかった。彼が手に持つている矩形の箱が、みるみる増殖しはじめて、鼻や口に入つて来そうになる。あわてて捨てると、空気のなかを焰の尾を曳き、水に落ちた薪のような音を立てて消え、空間いっぱい濃密な粘液が渦を巻き、ふたたび南に迫ってくるのだ。そうした形は妖怪というには無機質であった。それでいて妙に人を脅かす。彼等は次々に現れ、変化して南を休ませない。

魔され、いっぱい汗をかいて眼覚めると時計の夜光盤の針が十二時を少し廻ったところを指している。ヴェトナムから、このシエムリアップの診療所に働きに来ている看護婦が熱を計つていつてから二時間ぐらいしか経っていない。今夜も長い夜になりそうだった。

闇のなかで、よく締らない洗面所の蛇口から水が垂れる音がしている。枕元で守宮^{やもり}が啼いた。見たところは日本にいるのと変らないのに、意外に大きな声で、はじめの頃南を驚かした。気温は四十度に近いだろう。それなのに汗が出たあとのからだは冷えて、自分が平べったくなくてベッドの附着物になったような感じがある。苦しくて、同じ姿勢で寝ていられなかった二週間前に較べると、少しずつ楽になってきているのは確かだ。東京から一緒にここに来た「アンコール遺跡群調査団」のメンバーは、ずっと前に日本に帰っていて、それぞれの生活に戻っているはずである。南はそのことを自分との対比で考えられるようになっていた。

彼が、この調査団に加ってカンボジアに来たのは、中学の同級生であった著名な大学教授に誘われたからであった。彼は団長として、ディベロパーも一人参加していた方がいいから、と言ったのであったが、南の方にも日本を離れたい事情があったのである。

その少し前、男の子のいない彼が、将来は後を継がせてもいいと目をかけていた甥を社から追放するという事件があった。彼が株に手を出して社に損害を与えたからであったが、甥は南の処置を逆恨みした。弱きを助ける役割を自認する新聞が甥の訴えを取上げた。

人間関係が脆いものだとあらためて教えられて、南は自分の年を感じない訳にはいかなかった。昔は、困難に遭えば、父親の遺訓などを想起し、勇気を発揮して社を引張れたの

であつたが、今度は身内だったこともあつて南は内心に疲労を覚えていたのである。それだけに、無事に帰国できるのを喜びあつて、賑やかに戻つていたのであろう若い団員たちのことを想像すると、活力に溢れているというのはいいことだと感じたのであつた。

——いわゆる日射病から、軽度の脳血栓症状が現れているが、一過性のものだから安静にしていれば二ヶ月ぐらいで帰国できるようになるだろう——

長くこの町に駐在している診療所の甲斐にそう言われた時、そんなにかかるのかとがっかりしたのであつたが、寝ているあいだに少しずつ感じ方が變つてきた。東京の時間が後退りをはじめたのである。それは考えてもみなかつた心の変化であつた。東京にいた頃は、二週間だからいいが一ヶ月も会社を留守にしたら仕事に氣になつて仕方ないだろうと、ごく漠然と考えていた。それが、寝込んだ十日目ぐらいから氣分的に變つた。焦りが消え、町の物音、物売りの呼び声や子供を叱る母親の声、煙管キセル掃除の羅宇屋ラオヤの蒸氣の音などが聞き分けられるようになったのである。

「寝ていると、町の物音が聞えてきて子供の頃を思い出します」

回診に來た甲斐にそう言うのと、

「耳についてよく休めませんか」と聞かれ、

「むしろ懐しくて氣分が安まります」と南は答えた。

「御郷里は？」「御職業は？」と質問が続いた。もともとは繊維メーカーであったが、父親が機屋けいやの将来に見切りをつけて製造をやめ、型紙のデザインを起して昔の同業者に販売している。しかし、会社の主な収入は今では不動産事業から来ていると、南はありのままを説明した。

「もう少し恢復されたら、いろいろお話を伺いにお邪魔するかもしれません」

その時、甲斐は聴診器をヴェトナム人の看護婦に渡しながらそう言っただけで立上ったのだ。

深い皺が幾本も走っている陽焼した甲斐の表情の変化は、寝台から仰向けに眺めている南にそうはつきりと読みとれた訳ではなかったが、何か訳があつて聞きたいこと、話したいことがあるのは確かなように思われた。

「先生の御郷里も群馬県ですか」と聞くと、

「いやいや、そういう訳ではありませんが」

その日、甲斐はそう答えてそそくさと立上ったのであつたが。

南は、なかなか眠れそうにないと諦めて枕元の燐寸マツチを探った。

このあたりは一日二時間しか電気がつかず、夜の大部分は蠟燭で過ぎなければならない。自家発電の電力は、手術室と診察室だけで精一杯なのだ。

最初困惑したこうした状態も、慣れてみるとそれなりの知恵が働く。暗くなるまでにしておくことを決め、電気が来ているあいだにシャワーを浴びる、という具合に日課を決めると、あまり不便を感じなくなつてゆく。

昨日の晩、少し歩けるようになったので階下の玄関ホールで涼んでいると、黄昏のなかに仏桑華の花が浮び、外来控室の柱のまわりをしきりに蝙蝠が飛んでいた。そんな光景を南は楽しんで眺める心境になつていた。

倒れて四、五日は、動けるようになったら東京からみどり、とホームドクターの木元に迎えに来てもらつて、一日でも早く設備のいい病院に入ろうと考えていた。それに、開発許可を巡つて環境保護を旗印に掲げた反対派と烈しいやりとりを続けている西伊豆のホテル計画の推移も気がかりだった。

しかし診断どおりに恢復してきているからでもあつたろうが、ここ四、五日、南は少し違う考えになつていた。東京から妻と木元が来ることは、なにかと煩わしい東京が、彼を追いかけて来るような感じがするのである。それに懸案のビジネスも押寄せるのだ。その上、雨期直前のこの暑い時期に来れば、もともとそう頑健ではないみどりの方が病気になるってしまうかもしれない。

南はそう考えて、甲斐に頼んで、

——病氣快方ニ向ウ。間モナク帰国可能、安心サレタシ——

と電報を打ってもらった。甲斐は頷いて、

「まあ、二ヶ月が延びたとしても二十日以上にはなりません。前にも申し上げましたが、炎天下では水をどんどん飲まなければなりません。そうしないと血液の濃度が危険なまでに濃くなります。南さんはもともとコレステロールの値も低く、今は血圧もむしろ低目なぐらいで安定していますから、あとは末梢神経の軽い麻痺を取ることと、突発性の高血圧を警戒するだけです」

「なんだか、この機会に、少しここでゆっくりしたいような気になっています」

「それはいいません。それは危険です」

その甲斐の思いの他の強い語調に南は驚いた。彼は思わず上半身を起して医師を注目した。

「いや、私が申し上げたのは医学的に危険という意味ではありません」

甲斐は強すぎた忠告を緩和しようとしてもしているような、微笑を浮べた。すると、彼の深い皺のなかの目はこの上なく穏やかな光に彩られ、陽に焼けた丸い顔は、謎のような落着きに沈んだ。甲斐は、ふっと氣をとりなおしたように、

「一度、ここの氣候に慣れてしまえば、からだのコンピュータは熱帯地方の氣候の変化

を覚えて汗を出したり、休養を命じたりするようになりますから」

と、長く滞ることの危険の意味を説明してみせたのであったが。

「だとすれば、ここに住んでいる人が、日本のようなところに行けば、逆に具合が悪くなることになります」

「大いにあります。しかし血液の濃度に変化は起きませんから、むしろノイローゼとか、食欲不振というような症状ではないかと思えます。もっとも、文明の便利さはそれをカヴァーしてしまいますし、日本の方が『進んでいる』という観念がありますから、こちらからの旅行者は、からだの変調を我慢してしまうケースが大部分でしょう」

そして、甲斐は取って付けたように、このシエムリアップにも、今新しいホテルの計画が進められている、と南に告げたのであった。それは南が、西伊豆のホテル計画が気になる、と少し前に彼に話したのを思い出したからであつたろう。その時、南は、

「この国にいて日本の環境問題を考えると、変な気がします」と白状した。

あんなに文明化してしまっていて、その中に住んで、開発賛成といい、反対と言って争っているのは、ひどく両方ともいい気なような感じがするとも。もしかすると、文明化が、ここでは最大の環境擁護かもしれないではないか。

甲斐はそれに応えて、さあどうですかね、というように首を傾けたが、それ以上議論し

ようとはせずに、この国がフランスの植民地だった時代には、プノンペンにも、シエムリアップにも、フランス風の瀟洒なホテルがあったらいいと言った。

「一度、先生にお世話になったついでに、文明とは何なのだろうと言うような書生論を話し合ってみたいですね」

南は話の終りに甲斐にそう言い、彼は、

「大分元氣になりましたね。ここにいとちよいちよいそのことを考えさせられるので、僕の方からも伺いたいテーマです」

と立上ったのであった。南の会社は、西伊豆ばかりでなく日本のいくつかの地方で、県や市に誘われたような形で開発計画を立て、思わぬ反対に出会い、そうなるとうつたことなどなかったかのように自治体が冷くなるという経験を味っていて、甲斐に提案した議論の話は、なかば本気でもあったのであった。

それにしても、旅先で倒れた際に気の合う医師に会えたのは、幸運だったと言えそうだと、南は蠟燭の光が天井に揺ぐのを見ながら考えた。昼間甲斐に言ったように、ここにいて日本を振り返ると、ずっと遠い極東の、霞の向うの文明国という感じなので、その中にいて議論し争っているのは、温室のなかで怒鳴り合っているような不思議な感じなのである。こんなことは会社の者には言えないけれども、と南は、生きものの気配が満ち溢れるよう

な夜の気配のなかで反芻^{はんすう}した。寝ていると、倒れる前に毎日歩き廻ったアンコール遺跡群の佇い、遺跡を包囲していた熱帯樹林の烈しいざわめきと圧倒的な気配が伝わってくるようであった。その烈しさ、息吹きの逞しさに較べれば人間の争いが小さく見えてしまう。反乱を起した甥のことも、可哀相な男だと思えるようになった。しかしそんな体験のあとで日本に帰って自分を信頼してくれている社の幹部達と一緒に、今まで通りに働くのほとても大変なような気分になった。南は、山田、伊東、木村、田中、と次々に会社の幹部の顔を思い浮べてみた。みんな仕事熱心で、とても善良に見えてくる。それだけに、自分の重くなった心を隠すのは困難なように思われた。

（まだ、からだの調子が本当でないからかもしれない。すっかり治れば、また闘志が湧いてくるだろう）

南は自分に言いきかせるようにそう結論を下すと、蠟燭の火を吹き消した。一度に闇が拡がり、眠ろうと目をつぶっていると、遠くで長く尾を曳いて犬が啼いた。続いてあちこちで、まるで野犬が森の中からこのシエムリアップを包囲しているような呼応の仕方でありしきり啼きかわし、そして静まった。

甲斐がカンボジアに腰を据えて、内乱で傷ついた人々の医療救援活動をするようになって